

# こまどりと酒

小川未明

青空文庫



夜<sup>よる</sup>おそくまで、おじいさんは仕事<sup>しごと</sup>をしていました。寒い<sup>さむい</sup>、冬<sup>ふゆ</sup>のことで、外<sup>そと</sup>には、雪<sup>ゆき</sup>がちらちらと降<sup>ふ</sup>っていました。風<sup>かぜ</sup>にあおられて、そのたびに、さらさらと音<sup>おと</sup>をたてて、窓<sup>まど</sup>の障子<sup>しょうじ</sup>に当<sup>あ</sup>たるのがきこえました。

家<sup>いえ</sup>の内<sup>うち</sup>に、ランプの火<sup>ひ</sup>は、うす暗<sup>くら</sup>くともつていました。そして、おじいさんが、槌<sup>つち</sup>でわらを叩<sup>たた</sup>く音<sup>おと</sup>が、さびしいあたりに、おりおりひびいたのであります。

このおじいさんは、たいそう酒<sup>さけ</sup>が好き<sup>す</sup>でしたが、貧<sup>ます</sup>しくて、毎<sup>ま</sup>晩<sup>ばん</sup>のように、それを飲<sup>の</sup>むことができませんでした。それで、夜<sup>よ</sup>業<sup>なべ</sup>に、こうしてわらじを造<sup>つく</sup>って、これを町<sup>まち</sup>に売<sup>う</sup>りにゆき、帰<sup>かえ</sup>りに

酒さけを買かつてくるのをたのしみにしていたのであります。

野原のほらも、村むらも、山やまも、もう雪ゆきで真まつ白しろでありました。おじいさ

んは、毎まい晩ばん根気こんきよく仕事しごとをつづけていたのであります。

こう、雪ゆきが降ふつては、隣となりの人も話ひとはなしにやつてくるには難儀なんぎでした。

おじいさんは、しんとした外そとのけはいに耳みみを傾かたむけながら、「また、

だいぶ雪ゆきが積つもつたとみえる。」と、独ひとりごとをしました。そし

て、また、仕事しごとをしていたのであります。

このとき、なにか、窓まどの障子しょうじにきて突つきあたったものがあり

ます。雪ゆきのかかる音おとにしては、あまり大おおきかつたので、おじいさ

んは、なんだろうと思おもいました。

しかし、こうした大おお雪ゆきのときは、よく小鳥ことりが迷まよつて、あかり

を見てやってくるものだと、おじいさんは知っていました。これはきつとすずめか、やまがらが、迷つて飛んできたの  
だろう。こう思つて、おじいさんは、障子を開けてみますと、  
暗い外からはたして、一羽の小鳥がへやのうちに飛び込んでしま  
した。

小鳥は、ランプのまわりをまわつて、おじいさんが仕事をして  
いたわらの上に降りて、すくんでしまいました。

「まあ、かわいそうに、この寒さでは、いくら鳥でも困るだろう  
。」と、おじいさんは小鳥に近づいて、よくその鳥を見ますと、  
それは美しい、このあたりではめつたに見られないこまどりであ  
りました。

「おお、これはいいこまどりだ。おまえは、どこから逃げてきたのだ。」と、おじいさんは、いいました。

こまどりは、野のにいるよりは、たいてい人家じんかに飼かわれているように思おもわれたからです。おじいさんは、ちようどかこの空あいているのがありましたので、それを出だしてきて、口くちを開ひらいて、小鳥ことりのそばにやると、かごになれているとみえてこまどりは、すぐにかごの中なかへはいりました。

おじいさんは、小鳥ことりが好きで、以前いぜんには、いろいろな鳥とりを飼かつた経けい験けんがありますので、雪ゆきの下したから青菜あおなを取とつてきたり、川かわ魚かなの焼やいたのをすつたりして、こまどりに餌えを造つくってやりまし

た。

こまどりは、すぐにおじいさんに馴なれてしまいました。おじいさんは、自分のさびしさを慰なぐさめてくれる、いい小鳥ことりが家うちにはいつてきたものと喜よろこんでいました。

明あくる日ひから、おじいさんは、こまどりに餌えを造つくつてやったり、水みずをやったりすることが楽たのしみになりました。そして太たい陽ようが、たまたま雲間くもまから出でて、暖あたたかな顔かおつきで、晴はれ晴ばれしくこの真まつしろよなか白い世よの中なかをながめますときは、おじいさんは、こまどりのはいっているかごをひなたに出だしてやりました。こまどりは不思議ふしぎそうに、雪ゆきのかかった外そとの景色けしきを、頭あたまを傾かたむけてながめていました。そして日ひが暮くれて、またあたりが物もの寂さびしく、暗くらくなつたときは、おじいさんは、こまどりのはいっているかごを家いえの中なかに入れて、

自分の仕事場のそばの柱にかけておきました。

二、三日すると、こまどりは、いい声で鳴きはじめたのであります。それは、ほんとうに、響きの高い、いい声でありました。

おそらく、だれでも、この声を聞いたものは、思わず、足をとどめずにはいられなかつたでしょう。おじいさんも、かつて、こないないこまどりの声を聞いたことがありませんでした。

ある日のこと、酒屋の小僧が、おじいさんの家の前を通りかかりますと、こまどりの鳴く声を聞いてびっくりしました。それは、主人が大事に、大事にしていた、あのこまどりの声そっくりであつたからです。主人のこまどりは、雪の降る朝、子供がかごの戸を開けて逃がしたのでした。

「こんなに、いい声こゑのこまどりは、めつたにない。」

と、主人しゅじんは平常へいぜい自慢じまんをしていました。その鳥とりがいなくなつてから主人しゅじんは、どんなに落胆らくたんをしたことでありましょう。

「どこへ、あの鳥とりは、いったらう。」と、主人しゅじんは朝晩あさばんいつているのでした。

小僧こぞうは、思いおもがけなくこのこまどりの鳴き声なごゑを、道みちを通りすがりに聞ききましたので、さつそく、おじいさんの家うちへやってきました。

「お宅たくのこまどりは、前まえからお飼かいになつていたのでございますか？」と、小僧こぞうは、たずねました。仕事しごとをしていたおじいさんは、頭あたまを振ふつて、

「いや、このこまどりは雪の降る、寒い晩に、どこからか、窓の  
 あかりを見て飛んできたのだ。きつとどこかに飼つてあつたもの  
 が逃げてきたと思われるが、小僧さんになにか心あたりがありま  
 すか。」と、おじいさんはいいました。

小僧は、これを聞いて、

「そんなら、私の家のこまどりです……。」と、彼は、雪の降る  
 日に、子供が逃がしたこと、主人がたいそう悲しがって、毎  
 日いい暮らしていることなどを話しました。

おじいさんは、柱にかかっているこまどりのかごをはずしてき  
 ました。

「このこまどりに見覚えがあるか。」と、小僧に、たずねました。

小僧は、自分が、朝晩、餌をやったり、水を換えてやったことともあるので、よくその鳥を覚えていましたから、はたして、そのこまどりにちがいないか、どうかとしらべてみました。すると、その毛色といい、ようすといい、まったく同じ鳥でありましたので、

「おじいさん、この鳥に相違ありません。」といいました。

「そんなら、早く、この鳥を持って帰って、主人を喜ばしてあげたがいい。」と、おじいさんはいいました。

小僧は、正直なやさしいおじいさんに感心しました。お礼をいって、こまどりをもらって、家から出かけますと、外の柱に酒徳利がかかっていました。それは、空の徳利でありました。

「おお、おじいさんは、酒さけが好きすとみえる。どれ、主人しゅじんに話はなしをして、お礼れいに、酒さけを持もつてきてあげましょう。」と思おもつて、小僧こぞうは、その空からの徳利とくりをも、いつしよに家うちへ持もつて帰かえりました。

主人しゅじんは、いつさいの話はなしを小僧こぞうから聞きいて、どんなに喜よろこんだか  
しれません。「おじいさんにこれから、毎まい日にち徳利とくりにお酒さけを入いれ  
て持もつてゆくように。」と、小僧こぞうにいいつつけました。

小僧こぞうは、徳利とくりの中なかへ酒さけを入いれて、おじいさんのところへ持もつて  
まいりました。

「おじいさん、柱はしらにかかっていた徳利とくりに、お酒さけを入いれてきました。  
どうか、めしあがってください。」といいました。

おじいさんは、喜よろこびましたが、そんなことをしてもらつては困こま

るからといいました。

「わたしは、町へわらじを持つていって帰りに酒を買おうと思つて、

徳利を、柱にかけておいたのだ。」と、おじいさんはいいました。

小僧は、主人のいいつけだからといつて、酒のはいつている

徳利をまた柱にかけて、

「おじいさん、酒がなくなつたら、やはり、この柱に、空の徳利をかけておいてください。」といいました。

おじいさんは、酒が好きでしたから、せつかく持つてきたものをと思つて、さつそく、徳利を取つてすぐに飲みはじめたのであります。

酒を飲むと、おじいさんは、ほんとうに、いい気持ちになりま

した。いくら、家の外で、寒い風が吹いても、雪が降つても、おじいさんは火のかたわらで酒を飲んでいると、暖かであつたのです。

酒さえあれば、おじいさんは、寒い夜を夜業までしてわらじを造ることもしなくてよかつたので、それから夜も早くから床にはいつて眠ることにしました。おじいさんは眠りながら、吹雪が窓にきてさらさらと当たる音を聞いていたのであります。

明くる朝、おじいさんは、目をさましてから、戸口に出て、柱を見ますと、昨日空の徳利を懸けておいたのに、いつのまにか、その徳利の中には、酒がいつぱい、はいつていました。

「こんなにしてもらつては、気の毒だ。」と、おじいさんは、は

じめのうちおもは思おもいましたが、いつしか毎まい日にち、酒さけのくるのを待まつようになつて、仕事しごとは、早はやく片かたづけて、後あとは、火ひのかたわらでちびりちびりと酒さけを飲のむことを楽たのしみとしたのであります。

ある日ひのこと、おじいさんは柱はしらのところについてみますと、空からの徳利とくりが懸かかつていました。

「これは、きつと小僧こぞうさんが忘わすれたのだろう。」と思おもいました。しかし、その翌よくじつ日も、その翌よくじつ日も、そこには、空からの徳利とくりがかかつていました。

「ああきつと、永ながい間あいだ酒ざけをくれたのだが、もうくれなくなつたのだらう。」と、おじいさんは思おもいました。

おじいさんは、また、自分じぶんから働はたらいて、酒さけを買かわねばならなく

なりました。そこで、夜はおそくまで、夜業よなべをすることになりました。

「なんでも、他人たにんの力ちからをあてにしてはならぬ。自分で働はたらいて自分じぶんで飲のむのがいちばんうまい。」と、おじいさんは、知しつたのであります。

しばらくたつと、酒屋さかやの小僧こぞうがやってきました。

「じつは、せんだってまたこまどりが、どこかへ逃にげてしまったのです。もう、ここへはやってきませんか？」といいました。

おじいさんはそれで、はじめてもう酒さけを持もつてきてくれないことがわかったような気きがしました。

「どうして、大事だいじなこまどりを二度ども逃にがしたのですか。」と、

おじいさんは怪あやしみました。

「こんどは、主人しゅじんが、ぼんやりかごの戸とを開あけたままわき見みをしてるうちに、外そとへ逃にげてしまったのです。」と、小僧こぞうは答こたえました。

「それが、もし、おまえさんが逃にがしたのならたいへんだった。」と、おじいさんは、笑わらって、

「どんな人間にんげんにも、あやまちというものがあるものだ。」とい  
いました。

おじいさんは、毎まい晩ばん、夜よるおそくまで仕し事ごとをしたのであります。  
またおりおり、ひどい吹雪ふぶきもしたのでした。

おじいさんはうす暗くらいランプの下したで、わらをたたいていました。

吹雪ふぶきがさらさらと、窓まどに当あたる音おとが聞きこえます。

「ああ、こんやのような晩ばんであつたな。こまどりが吹雪ふぶきの中なかを、あかりを目めあてに、飛とび込こんできたのは。」と、おじいさんは独ひとり言ごとをしていました。

ちようど、そのとき、おりもおり窓まどの障しょうじ子こにきてぶつかつたものがあります。バサ、バサ、バサ……おじいさんは、その刹せつな那なすぐに、小鳥こどりだ……こまどりだ……と思おもいました。そして、急いそいで障しょうじ子こを開あけてみますと、窓まどの中なかへ、小鳥こどりが飛とびこんできて、ランプのまわりをまわり、いつかのように、わらの上うえに降おりて止とまりました。

「こまどりだ！」と、おじいさんは思おもわず叫さけんだのです。

おじいさんは、このまえにしたように、また、かごの空いたの  
 を持<sup>も</sup>つてきて、その中<sup>なか</sup>にこまどりを移<sup>うつ</sup>しました。それから、雪<sup>ゆき</sup>を  
 掘<sup>ほ</sup>つて、青<sup>あおな</sup>菜<sup>な</sup>を取<sup>と</sup>り、また川<sup>かわ</sup>魚<sup>ぎかな</sup>の焼<sup>や</sup>いたのをすつたりして、  
 こまどりのために餌<sup>え</sup>を造<sup>つく</sup>つてやりました。

おじいさんは、そのこまどりはいつかのこまどりであることを  
 知<sup>し</sup>りました。

そして、それを、酒<sup>さかや</sup>屋<sup>や</sup>の小<sup>こ</sup>僧<sup>ぞう</sup>に渡<sup>わた</sup>してやったら、主<sup>しゅ</sup>人<sup>じん</sup>がどん  
 なに喜<sup>よろこ</sup>ぶだろうかということを知<sup>し</sup>りました。

そればかりではありません。おじいさんは、このこまどりを酒<sup>さ</sup>  
 屋<sup>かや</sup>へやったら、先<sup>せん</sup>方<sup>ぽう</sup>は、また大<sup>おお</sup>いに喜<sup>よろこ</sup>んで、いままでのように、  
 毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の好<sup>す</sup>きな酒<sup>さけ</sup>を持<sup>も</sup>つてきてくれるに違<sup>ちが</sup>いないというこ

とを知りました。

おじいさんは、どうしたら、いいものだろうと考えました。

こまどりは、おじいさんのところへきたのを、うれしがるように見えました。そして、その明るる日からいい声を出して、鳴いたのであります。

おじいさんは、このこまどりの鳴き声を聞きつけたら、いまにも酒屋の小僧が飛んでくるだろうと思いました。

寒い、さびしかった、永い冬も、もうやがて逝こうとしていたのであります。たとえ吹雪はしても、空の色に、はや、春らしい雲が、晩方などに見られることがありました。

「もう、じきに春になるのだ。」と、おじいさんは思いました。

やま 山から、いろいろのことり小鳥が、里さとに出てくるようになりまし  
 ひひかり日の光は、一日いちにちましに強つよくなつて、空そらに高たかく輝かがやいてきました。お  
 じいさんは、こまどりのかごをひなたに出だしてやると、さも広ひろび  
 々とした大空おおぞらの色をなつかしむように、こまどりはくびを傾かたむ  
 けて、止とまり木ぎにとまつて、じつとしていました。

「ああ、もう春はるだ。これからは、そうたいした吹雪ふぶきもないだろう。  
 むかしむかしひろく大空おおぞらを飛とんでいたものを、一生しょうこんな狭せまいかごの中なかに  
 入いれておくのはかわいそうだ。おまえは、かごから外そとへ出でたいか  
 ?」と、おじいさんは、こまどりに向むかかっていつていました。

こまどりは、しきりに、外そとの世界せかいに憧あこがれていました。そして、  
 すずめやほかの小鳥ことりが、木きの枝えだにきて止とまっているのを見みて、う

らやましがつているようなようすに見えました。

おじいさんは、酒屋へいつてかごの中なかにすむのと、また、広い野原のほらに帰かえつて、風かぜや、雨あめの中なかを自由じゆうに飛とんですむのと、どちらが幸福こうふくであろうかと、小鳥ことりについて考えかんがずにはいられませんでした。

また、酒さけの好きすなおじいさんは、この小鳥ことりを酒屋さかやに持もつていつてやれば、これから毎まい日にち自分じぶんは、夜業よなべをせせずに、酒さけが飲のまれるのだということをも思おもわずにはいられませんでした。しかし、おじいさんはついに、こまどりに向むかつて、

「さあ、早はやくにげてゆけ……そして、人間にんげんに捕つかまらないように、山やまの方ほうへ遠とおくゆけよ。」といつて、かごの戸とを開あけてやりました。

もう、<sup>きこう</sup>気候も<sup>あたた</sup>暖かくなつたのでこまどりは、<sup>いさ</sup>勇んで、<sup>ゆうぐ</sup>夕暮れ方  
の<sup>そら</sup>空を、<sup>ひ</sup>日の<sup>お</sup>落ちる<sup>ほう</sup>方に向<sup>む</sup>かつて<sup>と</sup>飛んで<sup>よ</sup>ゆきました。その<sup>のち</sup>後また、  
<sup>ふぶき</sup>吹雪の<sup>よ</sup>夜はありましたけれど、こまどりは、<sup>かえ</sup>それぎり<sup>かえ</sup>帰つてはき  
ませんでした。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊦」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷

1977（昭和52）年C第2刷

※表題は底本では、「こまどりと酒《さけ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：へくしん

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://w>

ww.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# こまどりと酒

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>